

清風翁と清風松

(11)



翁には驚くほど多くの詩句歌があるが盛徳偉業に辛苦を偲ぶものとして、天保十年一月作の「国歩艱難」の一首を記して翁当年の心中を察したい。

たえ

我が家のちりを払いし松風の
声はのきばになほのこりけり

4、三隅山荘

国歩艱難策未だ成らず

(時艱にして明策未だならず)

身を忘れて聊か献ず野芹の誠

(一身の利害得失を考えず野芹の誠をささぐ)

才疎にして萬事人望に違ひ

(人の誇りの裡に己を空にして杭す不屈の信念)

徳は薄くして多年世情に負く

(多年至誠を以て君国に仕うるも不徳のため世人に理解されぬ)

皎月門前誰か石を砕き

(月のある夜清風門前の石橋を砕き)

芳梅籬外棠楹を剪る

(折角芳しく咲いた梅の幹を伐る)

松を撫して唯託す千秋の後

(庭の松をなせ、お松よ千年の後にも問う人がいたらお前だけはわが心を知っている)

清風に問うあらば我名を答えよ

(昔のことをお前か松風の音に語り聞かせてくれよ)

3、藩主の感懐

翁の歿後忠愛公は清風の功績をた

たえ

我が家のちりを払いし松風の
声はのきばになほのこりけり

山荘は三隅町沢江(ひかし袖の
湊)の小丘にあり、三隅湾が一望
出来る景勝の地を占めている。建
物は清楚な天井の低い茅屋で当時
の武家屋敷が今日もそのままに思
ばれて床しい。文部大臣から指定
されたこの旧宅(三隅山荘即ち尊
聖堂)は、翁自らの設計(別掲設
計写真参照)によるもので、嘗
つて史蹟下調査のため出張した、
建造物、調査室兼松松技官の検分
では、西側北面八畳と東側式台(玄
関)がその後で於て手直しされ
ているが、他は殆ど旧態が保たれ
ているようだとのことであった。
さすがに爛眼で、西側庭に面し
た八畳は尊聖堂で北側をふさいで
聖壇を設け孔子聖像が安置され板
敷で、南側から拜礼するようにな
つていたものである。

翁が自ら身を立てても、常に崇
敬厚かった聖像の思徳だと確く信
じ、永く子孫にその本を忘れぬよ
うに戒められたと言う。

その手前床のある様つきの六畳
は、懐徳堂と名づけられ、藩主容
徳公が深川湯本へ湯治の際山荘へ

立寄って御休息遊されし恩徳に感
じて、かく名づけたもので、以て
当時の君臣間の礼節と、徳望のほ
どがしのばれる。

西側は渡り廊下で両便所に通じ
聖像の間、懐徳堂の間、南側次の
六畳の三室は単なる座敷で南側中
庭を隔てて長屋物置に面し、長屋
の傍に翁の産湯の井戸がある。尊
聖堂や懐徳堂を除いて翁自身の常
用の室は全く手狭で、簡素の生活
振りがよく思ばれる。

尊聖堂、懐徳堂を含めて旧宅は
三十一坪五合で、湯殿と思われる
ところ三坪、長屋の続き面に六畳
があるが、使用者の室かと思われ
る。長屋、物置を合わせ中庭の南
側は十七坪となっている。

以上は別掲翁の設計図による筆
者の観察を述べたもので、その後
後裔大津家によって、南側長屋、
物置、湯殿、台所の一部等が解体
され、新たに西側に土蔵が建ち、
湯殿、台所等が改造されている。
これは昭和二十年波多野勝好画伯
の描いた山荘の油絵でよくわかる
ここに注目すべきは画伯がその説
明図(ハ)に示された屋外の尊聖
堂である。尊聖堂は実は山荘本屋
内に設けられていたのであって(ハ
)と図示されたものは次に記す
劍槍稽古場と思われる。

恰も天保十四年四月一日羽加台
大操練があり、その翌五月十五日
にこの劍槍稽古場が山荘入口右側
に建立されていくことは史実によ
って明らかである。これを後人が
尊聖堂と誤り伝え、その石標も其
傍に移築したものと考えるがこれ
は最も大切な事ゆえ慎重に判断す
べきだと思ふ。

時は維新回天の前夜といふべく

憂国慨世の志士、碩学達の多くが
翁を山荘に訪うてその単識と忠誠
心に頭を垂れている。

山山人

何事も変り果てたる今の世に
昔ながらの三隅山荘
以上で終了
白藤 董

文芸

清風句会

〔三〕 光

天 若者は花の下には止まらず

梅 雪 当世の若者にはオートバイとか
車とか、機動力があるので、ゆっ
くり腰をおちつけて、花を鑑賞す
る気分にはなれないかも知れない。

地 はくれんの一樹が闇を深うする

兎 史 夕闇に浮ぶ白蓮は幽玄にして、
一層まわりの闇を深くする様に思
われる。

人 啓塾の蜘蛛か畳に葉師寺

元 奈良の葉師寺に参って見た時、
畳の上蜘蛛が這っていて今冬眠か
ら覚めたばかりの模様。何か葉師
寺といえ、そうした寺の様な気が
する。

〔五〕 客

生垣の葉裏葉表風光る

千代

沈丁の香にたぐずみぬ朝の試歩
一平
新婚の旅立つホーム風光る
旬 一
春泥をはねし車に傘開き
ひで
大鳥居崩れんばかりのあさり堀り
梅雪

〔七〕 賢

校门に先師の座像風光る

餅拾う人春泥を避けて佇ち

春泥に僧の素足のわらじばき

春愁の捨てどころなし独り居に

浅刺吹く磯の香一っぱい朝厨

木の芽和え二人暮らしの小すり鉢

春愁や兄のかたみの松葉杖

工場も活気あふるや風光る

春愁や慰めくれる人もなく

桜散る閑趾に往時偲びけり

碑の文意難解花の下

兄貴ぶる子もあり花のこり台

合格に辛かりし事も忘れ去り

うららかな花見に交る老の杖

万灯の唐招提寺落花散る

春風や園児と共に草に座す

信子

〔十〕 哲

春泥に踏入れ脱ぎし靴のあり

旬 一

工場も活気あふるや風光る

春愁や慰めくれる人もなく

桜散る閑趾に往時偲びけり

碑の文意難解花の下

兄貴ぶる子もあり花のこり台

合格に辛かりし事も忘れ去り

うららかな花見に交る老の杖

万灯の唐招提寺落花散る

春風や園児と共に草に座す

信子